

春日部福音自由教会 2021年2月21日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）

聖書 新約聖書 マルコ 10章28節～34節

説教 「人の子は渡される」 小野信一牧師

おはようございます。2021年2月21日の春日部福音自由教会中央会堂の主の日の礼拝を共に捧げております。マルコの福音書10章28節から34節までが朗読されました。今朝はこのみことばから「人の子は渡される」と題してみことばを取りつがせていただきます。

I. 捨てた人は受ける

初めて出会った青年との会話のあと、イエス様は再び、いつも一緒にいる弟子たちに顔を向けます。ペテロが話しかけて会話が始まり、弟子たちとの対話、そして歩いていき進んでいながら、弟子たちにさらに語ったことがこの箇所に書かれています。

先週の水曜日から40日間の受難節に入りました。6週間半。今日で復活祭まであと6週間になります。残り6週間の間、キリストのみ苦しみを覚えて心を備えて過ごしたいと思います。まず、今日のみことばの最初28節でペテロが言った言葉から、もう一度目を留めていきたいと思います。『ペテロがイエスにこう言い出した。「ご覧ください。私たちはすべてを捨ててあなたに従ってきました」』と書かれています。ペテロが「ご覧ください。私たちはすべて捨てました」とイエス様に言います。この前の所では、多くの財産を持っていた人が顔を曇らせて悲しみ立ち去った、ということが書いてありました。「持っているものをすべて売って与えなさい。そして来て、わたしについてきなさい」と言われたのですが、その日、その人はそれをするのができなかった。ペテロは「私たちはすべて捨ててきました。ご覧ください。」と言っています。確かに、この福音書のマルコ1章18節に【網を捨てて従った】と書いてあるように、網=それまでの自分の仕事道具・家・家族などを後ろに置いて、捨てて従ってきたという面がありました。そこでイエス様との対話が始まっていきます。「私たちは全て捨てました」とペテロは言うのです。今日は34節までを朗読していただきました。この新改訳聖書で言いますと、二つの段落に渡っています。そのもう少しあとの段落になりますけれども、イエス様は45節で「自分の命を与える」ということを言っておられます。ペテロは「私たちは全てを捨てた。網や船や家族を後ろに置いてきた。」と言うのですけれども、イエス様は「わたしは自分の命を与えるために来たんだ」というふうに言われます。45節にその言葉が出てきますが、そこまではまだちょっと先がありますので、今はこの28節のすぐあとから見ていきたいと思えます。

29節から31節のところ、イエス様は言います。「まことにあなたがたに言います。これは本当です。わたしのため、また、福音のために大事な家や兄弟や姉妹、家族

や、また、畑を捨てた人は必ず受けます」。「捨てた人は受ける」とイエス様は約束されました。何を受けるか？どこで受けるか？「今この世で、迫害とともにそれらの100倍を受ける」「捨てたものの100倍を受けるであろう。そして、来たるべき世で永遠のいのちを受けます」。これがイエス様の約束です。イエス様のために、また福音のために、「家・兄弟・姉妹・家族や母・父・子ども、そして畑を捨てた者は、今この世でそれらを100倍受ける。そして来たるべき世で永遠のいのちを受けます」とイエス様は約束されます。先週のひとつ前のみことばのところで言えば「持っているどんなものよりもイエス様を第一にし、イエス様についていくこと、イエス様と一緒にいることをどんなものよりも大切に思う人は祝福を受ける」。そして「イエス様を第一、神様を第一にして、他のことを第二、第三番目にした人は、その第二番目・第三番目のものも大いに受けるだろう」と約束されています。

Ⅱ.二つの世 二つのからだ

30節に「世」という言葉が2回出てきます。2つ出てきます。「今この世」と言う「世」と、「来たるべき世」という「世」です。この二つの世は、一体どういうものなのでしょう？今あるこの世界はあるが、この世代は終わりを迎えて過ぎ去る。そして新しい世が来る。新しい世界が来る。新しい世代が始まる。それは「新しい天と新しい地」と言っても良いかもしれません。

「今のこの世はやがて終わるのだ。そして、新しい世が来る。」その【来たるべき世】があるというわけです。この二つの世の関係はどういうことなんだろうかっていうことを、少し考えてみたいと思います。この二つの世は関係があるのでしょうか？ないのでしょくか？どうつながるのでしょうか？今の自分は、私はこの二つの世は繋がっているのではないかと思っています。でも、前は、“今の世とのちの世は無関係”と思っていたかなと思うのです。“今のこの世とは全く関係のない新しい世界が来る”、というふうにイメージしていたように思います。でも、今は“つながっているのではないか”と思うのです。今ある世と、次に来たるべき世が。というのは、私たちには今このからだがありますが、やがてこのからだは役目を終えていきますね。老いて、そして、息をしなくなり、死に、葬られ、朽ちていく【朽ちるからだ】ですね。で、今のこのからだではない別のからだをいただく時が来ます。復活のからだ、栄光のからだ、イエス様が蘇った時のからだと同じようなからだをいただくことになるのです。でも、その、あとでいただくからは、今持っているこのからだとは全く無関係なのでしょう？どうなのでしょう？イエス様の復活のからだには傷跡があったということがありましたよね。なので、イエス様のからはもうこの世にいる時のからだではなかったし、扉があっても、閉まっても、壁があっても通り抜けられる、違うからだでありました。でも、傷跡はあったんです。手と脇腹に傷跡がありました。穴があったというか、そこに「入れてみなさい。指を入れなさい。手を入れな

さい」とイエス様は言われました。ですので、全く新しくなるんですけれども、今あるからだと何らかの繋がりがあ、そういうからだをいただくのだらうと思うのです。一度傷ついたらだ癒されますが、傷ついたことをなかつたことにするのではない、というのが神様のやり方、神様の癒し方、解放のしかたなのだらうと、だんだんと思うようになりました。ですから、私たちはこのからだは将来いただくからだとは違ふんですけれども、でも、ある意味これをもとに新しいからだが作られ、いただくってことなのかもしれません。そういう意味では、限りある命ですけれども、大切にすべきからだなのだらうと思います。同じように、今ある世、そして来たるべき世は全く違ふものですが、もっとずっと素晴らしいものですが、「今あるものと全く関係がない」というよりは、何らかの意味で繋がっているのではないか、というふうに理解するようになりました。「今この世で迫害と共に（今のこの世には迫害・攻撃・苦しみがあります。しかし）そこで家・兄弟・姉妹・母・子ども・畑・その大切なもの、大切だけそれよりもイエス様を大事にした、その大切なものを豊かに受けます。そして来たるべき世で永遠のいのちを受けます」とあります。もう一つの問いがあります。永遠の命って何ですかってことです。永遠の命というのは、今ここにある世の中、今生きている、このからだを持って生きているこの世では関係ないもので、来たるべき世のものですか？ということです。“永遠の命とは死んだあとの問題ですか？”という問いですね。これもどうでしょう？皆さんの理解、イメージはどうでしょう？

私は子どもの頃から聖書の言葉を教えられて育ちましたが、高校1年生の15歳の時に父方の祖母が亡くなりました。クリスチャンであった父方の祖母が召されて、自分の記憶では初めて教会でのお葬式に参加しました。時々自転車で病院にお見舞いに行っている会に行っている身近な祖母が実際に亡くなった、もう会えない、もう話せなくなりました、ということと、小金井の教会で葬儀がありましたが、そこで「もう話せないんだ」「もう会えないんだ」ということと共に、「おばあちゃんは本当に今、天国で生きているんだ」ということを何か初めて実感というか、リアルに思うようになりました。それまでも「天国がある」「永遠のいのちがある」ということは聞いてたし、知ってたし、信じていたわけですが、あまり自分と関係がないもの、遠いところに感じていました。でも、おばあちゃんが天国に行ったんだと思った時に、「おばあちゃんは今天国に行き、そこで生きている。リアルなんだ」というふうに感じるようになったのです。一方、私はそれから、死んだあとも永遠の命があるし、天国があると、だからおばあちゃんにまたそこに行けば会えるんだと思ったと同時に、果たして自分は行けるのか？本当に信じてるのか？ということを考え始めるきっかけにもなりました。それで、その後、18歳19歳ぐらいになってから、永遠の命というのは何なのかっていうことですね、それは「死んだあとももらえるもの、死んだあとも始まる命というのではないんだ」ということを聞いたんですね。「もしあなたが今日イエス様を信じているならば、【今日】、あなたの中に

永遠のいのちがもう始まっているんですよ」と聞いて、あ、そういうことかと思ったんですね。今生きている命は、この肉の命が終わったら別の命がもらえるみたいに思ってたんですけど、それだけじゃない。そうではなくて、今、からだの命が生きている今、霊のいのちが誕生し、永遠のいのちをもういただいている、もう始まっているんだということを知るようになりました。神の国も、永遠のいのちも、もうすでに始まっているのです。私たちの内に、一人一人の中に。でも、神の国も永遠のいのちもまだ完成してませんし、完全にはなっていません。これから来るものがあるわけです。神の国はもう始まっているんですが、まだ十分には現れていなくて、これからやって来る。これから実現します。永遠のいのちはもう始まっていますけれども、まだ十分には受けていないのです。それをフルに十分に受ける時が、やがてあとで来る。そのことをこのみことばからも思い起こさせられ教えられます。

Ⅲ.そばに呼んでくださる

さて、後半です。32節から34節のところ、ここでイエス様にこれから起こることが語られ記されています。苦難の予告です。マルコの福音書における苦難の予告の3番目3回目であり、最後の予告であり、はっきりとした苦難の予告の箇所です。そして、イエス様はここで「わたしたちは行くのだ」と言われます。

32節。「エルサレムへ」。イエス様と弟子たちはエルサレムに上る途中でした。イエス様が先頭に立ちます。イエス様が先頭に立つその様子を見る弟子たちが驚き、「ついていく人たちは恐れた」とあります。今年はあと6週間で復活祭ですけれども、おそらく去年の復活祭と同じように、道での模擬店とか行事とかいろんなことはできないと思われまます。受難劇も今年もできないでしょう。受難劇を毎年していた時に、この場面で「ここでイエスが先頭に立つ」と脚本に書いてあったんですね。「さあエルサレムに行こう」と言って、イエス様がエルサレムを指差していくわけです。そして「立派な建物だ」ということを弟子たちが言うわけですけれども、その時にイエス様が先頭に立つのです。それまでは、劇の中で最初に弟子が出てきて、それからイエス様が出てくるという順番でした。ここで、このところを変えてたんですね。イエス様はここで再び12人をそばに呼んだ。そして、「ご自分に起ころうとしていることを話し始めた」と書いてあります。おそらくこの時12人がいたでしょう。その前に出てくる「弟子たち」というのは12人のことを指しているのかなと思いますが、そのほかについて行く人たちっていうふうにも書いてありますので、これはもしかすると12人以外の男女の弟子たち、70人の弟子たちとか120人の弟子たちのことを指しているかもしれないと思います。12人を再びそばに呼び、親しく話します。ご自分に起ころうとしていることを話し始めます。イエス様は群衆と話をしたり数多くの人と話をする時、また、一人の青年と一対一の対話をする時もありましたけれども、弟子たちとの時間を大事にして、ついてきた12人、70人、120人を

集めて話をされました。また、12人だけをそばに呼んで話をすることがありました。イエス様は弟子をそばに呼び、親しく話をされます。私たちもそうです。私たちもイエス様に呼ばれているのです。イエス様は周りにたくさんの群衆がいる、この世の人たちがいる中で、教会に来るように呼び集めてくださっています。そして、その中でもいつも一緒にいる身近な弟子たちをそばに呼んでくださる時があります。私たちはそのようにしてイエス様に呼ばれています。イエス様は私たちをそばに呼んでくださっている、親しく語ろうとしてくださっているということを、いつも思い出しましょう。この礼拝の場もそうですよね。イエス様が「近くに來なさい。そばに來なさい。そばに來て聞きなさい。」と呼んでくださっている。イエス様は親しく語られます。ご自分に起こることとその意味を語られます。この意味はさっき少し触れた45節辺りの所になりますけれども、今日の箇所33・34節では、ご自分に起こることを語っておられます。「あなたたちにはわかっておいてほしい」と、それがイエス様のお心なのではないでしょうか。たとえほかの多くの人が悟れないとしても、周りの多くの人が全然それを考えずに過ごしているとしても、「あなたたちには言うておく。これからわたしがどこに向かって、何が起こるか、何をしようとしているかをあなたたちには知っておいてほしい」と、そういう思いでイエス様は12人をそばに呼んでおられ、また今日もこの日曜日、この礼拝の場に、この中央会堂というこの場所、また1人1人が家やいるところで、神様の前に自分のからだを携えて時間を捧げて、場を整えて、礼拝を捧げているその場に、イエス様が親しく呼んでくださっているのです。ヨハネ15章に「みなあなたがたに知らせたからです」という言葉があります。15章15節だったと思いますけれども「父から聞いたことをみなあなたがたに知らせた。」「すべてあなたがたには知らせたからです。だからわたしはあなたがたを友と呼んだ。あなたがたはわたしの友だ」と言われましたね。イエス様は親しい弟子たちを呼んで、父から聞いたこと、ご自分のお心にあることをみなお告げになろうとしてくださっています。

IV. 苦難の予告

そして言われました。「見よ。われらは行く。エルサレムに」「ご覧なさい」というのは「さあ」と訳してもいいでしょうし「見なさい」「ごらんなさい」でもいいですが、直訳的には「見よ」ですね。「見よ。私たちは上る。エルサレムに。そして、人の子は、すなわちわたしは引き渡される」と言われました。「祭司長たち、律法学者たちに引き渡される。彼らは人の子、すなわち、わたしを死の刑に定める。死の罪に定めます。そしてまた、異邦人の手に引き渡します。」34節「異邦人は人の子、すなわちわたしのことを嘲り、唾を吐きかけます。むちで打ちます。そして殺します」。イエス様はご自分がこれからどこに行くのか、何をしようとしているのか、何が起こるのかをご存知でした。そして、ご自分が知っていることを弟子たちには、身近な弟子たちには知っておいてほしいと

話をされたのです。「唾を吐きかけ、むちで打ち、殺します」。とても痛ましい悲しい知らせです。しかし、そこで終わりではありません。イエス様は言われます。「しかし、人の子、すなわち私は3日後によみがえります」と。これからエルサレムに行く。苦しみを受ける場所、死に場所である、しかし、死んで終わりではない。よみがえる。それをイエス様は見ておられるのです。私たちはこれから6週間の間、イエス様の地上の歩みを思い、苦しみを思い、イエス様がどんなに心を痛めたか、どんなにからだが痛んだか、どんなふうに血が流れたかを思いながら過ごしたいと思います。でも、それで終わりではないのです。受難週の金曜日がクライマックスでもないし最終でもないのです。それから3日目に復活祭が来ます。復活の日が来ます。イエス様はそこまで見通して弟子たちに語ってくださいました。

「彼らは人の子を死刑に定めます」。これを直訳すると「死の刑」あるいは「死の罰に」、あるいは「死へと罪に定める」というふうに訳しても良いと思いますけれども、この「罪に定める」という言葉も受難劇の一場面に出てきます。ヨハネ8章で姦淫の現場で捕らえられた女性に向かって、イエス様が言います。「わたしもあなたを罪に定めない」。イエス様はあの一人の女性に対してそう言ってくださいました。また、今ここでイエス様に呼ばれて、イエス様のそばに来ている私たち一人一人にも言ってくださいます。

「わたしはあなたを罪に定めない」と、なぜ罪に定めないでいられるのか？それは人の子がイエス様ご自身が代わりに罪に定められるからです。そのことをイエス様はここで語られました。

今年受難節が始まりました。受難節、キリスト教国ではですね、その間に肉を食べないという人がいたりします。何かを断つって習慣があるわけですね。一方、「その期間が来る前に肉を食べましょう。飲んで、騒いで、踊りましょう」という祭りをする国もあります。それがカルナバル=カーニバルですけど、今年はリオなどのカーニバルもいったん6月か7月に延期するって決めて、それからやっぱり中止です、というふうになったと聞いています。

それでも受難節は来ます。5週間後に受難週が来ますし、6週間後に復活祭の日が来ます。道路での模擬店も受難劇もできないでしょう。静かに主のみ苦しみに、より集中する受難節の残り36日としたいと思います。渡され、罪に定められ、さらに渡され、嘲られ、つばを吐きかけられ、むち打たれ、殺される。イエス様は、天から下って人となり、この地上の人生の中で降りて、降りて、降りていくイエス様でした。そうして裸にされ、衣を剥ぎ取られ、小石や鉄片のついた革ひものむちで打たれ、肩や背中^おの皮膚が破れ、肉が見え、血が流れたイエス様のおからだ。でも、その降り切った、降りきったところから、そこからよみがえった主イエスです。勝利した主イエス、その勝利を目指して私たちもへりくだり、イエス様とともに降りていく道^おを共に歩みましょう。低く、低く、低く、降り^{くだ}みましょう。この世のこの時代のどの人たちよりも、イエス様に従う者として自分を低

くならせさせていただきます。そして、その先には死への勝利があります。罪への勝利があります。よみがえりの勝利が待っています。でも、だからこそ、私たちは日々自分の弱さと向き合い、罪と向き合い、それを認めてへりくだります。私たちは全員、本来生まれながらの人間としてはへりくだることができない人間です。罪を認めることができない人間です。しかし、主イエスを思うことによって、また、私たちを砕く聖霊の助けによって低くならせさせていただきます。

V.いっしょに行こう、小さな死への旅

今日このあと歌う賛美は、新聖歌 395 番の「主はガリラヤ湖の漁師に告げぬ」という歌です。今日歌いませんけども、隣の 396 番には「十字架担い行かん 愛する主の^{あと}後^を」という歌詞があります。「Follow Me」「わたしに従いなさい」とイエス様が呼んでおられます。

その主が先頭に立って行かれます、エルサレムへ。苦難の場所・死に場所、そして甦りと勝利の場となるエルサレムへと、主が先頭に立ちます。私たちは 12 弟子と共に、また 70 人の男女の弟子たちと共に、主イエスについていきます。イエス様は死にに行くのです。でも、33 節をもう一度見てください。「わたしたちはエルサレムに上って行きます」。「わたしたちは行く」とイエス様は言われています。「わたしは行きます」「わたしはエルサレムに行きます。そこで死にます」だけではないのです。12 人を近くに呼んで、「わたしたちは行く」と言われました。死にに行く旅でさえ、イエス様は一人ではありませんでした。あの 12 人が一緒に行きました。そしておそらく 70 人、120 人の男女の弟子が、周りをついて歩いたでしょう。あの不完全な 12 人の男たち、ある意味で情けない男たち、そして時に自己中心の男たち、また女たちであったのに、イエス様は「一緒に行こう」とエルサレムへと、死に場所へと、【一緒に行く仲間】とし続けてくださいました。「わたしはエルサレムに行く。あなたたちと共に行く。」「さあ、わたしたちはエルサレムに行くのだ」と言われました。私たちも 12 人に負けず劣らず、お互いが自己中心の罪人であり、不完全な弟子であり、不従順、不十分なキリスト者、ふさわしくない奉仕者です。しかし、それでもイエス様は、私たちのような不十分な弟子集団にも、最後まで、十字架まで、エルサレムまで、「一緒に行こう」と言ってくださいます。やる気を失いそうになってしまったり、報いを求めたりする私たち。競争したり、互いをさばいたりしがちな私たちを、それでも十字架への旅をする道連れ、仲間と認めてくださいます。ここにいる今、こうやって一緒に礼拝している会堂内の人、家にいるそれぞれも、ここにいるお互いはそういうお互いです。イエス様が呼び集めてくださった、イエス様が【仲間】だと呼んでくださっている一人一人です。

今日は週報の中に（今日は 4 ページにしましたけども）その中に一つの祈りを紹介させていただきます。ヘンリ・ナウエンという人の祈りです。私たちが行く道はイエス様に

ついて行く道です。ということは、私たちが行く道は死への道です。死を通過して復活し、勝利する道です。「小さな死でありますように」と、ナウエンの祈りにあるように、私たちの行く道は、進めば進むほど死に近づきます。それはすなわち自分を与える道です。

「イエス様の道に行く」それは自分が「何かを得る」「手に入れる」というよりは、「手放し、与えていく道」です。「誰かのために死ぬ」、そういう道です。イエス様は、エルサレムに死にに行きます。いのちを捨てに、いのちを与えに行きます。単に「死ぬ」「惨めに死ぬ」というだけではなくて、死を乗り越えたその先に、勝利を見ておられます。イエス様は自分を与えて、ほかの人たちにいのちを与えようとしておられます。私たちキリストを信じ、キリストに全体重を預ける一人一人が歩む道は、そのように、どこかで誰かのためにいのちを与えて行く道です。誰のためにでしょうか？ どんな相手でしょうか？ 正しい相手でしょうか？ 完璧な相手のためになら自分のいのちを与えられるのでしょうか。そういうのではないのです。偉大な相手のためにでもありません。小さな人のために、不完全な人のために、自分のいのちを捨てる。それがイエス様が歩んだ道でした。私たちが行く道でもあります。

一生懸命やっても無駄だったように思う時がある。何にもならなかったと思う時があるかもしれません。ナウエンのこの祈りの中にもそのような言葉があります。

「たとえ、すべてが無駄で、無意味で、時間と労力の浪費のように見えても。」

「こうしたことが、私よりはるかに深く苦しんでいる世界の幾百万の人々と連帯する経験となり、私にとって、あなたと共なる、またあなたのための小さな死でありますように。」

私たちは小さな死へと向かって進みます。イエス様は大きな死へと向かって進まれました。決然と顔を向けて。私たちも小さな死へと顔を向けます。「主よ。小さな私たちを、手放すこと、失うことを恐れずに与えることを厭わない者としてください」そう祈りつつ、主イエスのあとと一緒に歩いて行くのです。イエス様が「行こう」と言ってくたさるので。分かっていない弟子たちをイエス様は招きます。「一緒に行こう」と。私たちのイエス様との旅は死への旅、小さな死への旅です。手放し、与え、人を生かす、そういう人生への旅です。イエス様が「一緒に行こう」と呼んでおられます。

お祈りを致しましょう。

主イエス様。あなたが死に場所エルサレムへと向かって歩まれたことを思い起こし、胸に刻む季節が今年もやってきました。復活祭までの6週間、地上を歩まれた主イエスを、自分を低くされたイエス様、あなたを思いながら、過ごす者とならせてください。

主イエスキリストの御名によってお祈りします。 アーメン